
第三部 旅路の果ての仇討ち

 まだ疲れている筈だからと説き伏せて、デイナーザードは鶴ちゃんを再び寝つかせた。ついでに、騒ぎを聞きつけて、やってきた自警団の若者連中を上手く言いくるめ（結構な苦勞だった）、警察シニルタの爺様を宥めて（こっちは楽勝だった）の八面六臂の大活躍だった。その間、フウルウの野郎は部屋でぐーぐー寝ていたのだと考えると実に腹が立つ話である。とはいえ、問題は何も解決していない。例えば、大穴が開いた二階の一室は当分の間、封印するしかないし、村の連中に言った『あたしにもよくわからないんです』という台詞は決して嘘ではない。

だから、デイナーザードは事が済むと真っ先にフウルウの部屋に上がりこんだ。妙齡の淑女としては野郎の部屋に一人で行くことには抵抗があったが、やむをえない。

部屋に入るとフウルウの野郎は読書に没頭していた。今日に限った話ではないが、今日に限っては感心できなかった。とはいえ、とりあえず、デイナーザードは開口一番、
 「先生、変わりましたね」と尋ねた。

予想していたのとは異なる問いかけに、フウルウはいささか戸惑った。
 「何がだ？」

「あの横転事故ですよ。方便としての嘘なんて、先生らしくない。少なくとも、初めて会った頃のあなたには考えられないことですね」

デイナーザードがまっすぐに見つめてきた。別に隠すようなことではない。鶴に聞こえないように彼らに伝えた言葉はおかしなものではない。『こちらに戦意はない』『ここは退け』とか当たり障りのないものがほとんどだ。連中が撤退したのも、フウルウの説得に応じたというよりも、純粋な戦術的判断からだろう。

——もつとも『状況が確認できれば、彼女を差し出すこともありうる』という一言はちよつとまづいかもしれない。

無言のまま、デイナーザードの眸と髪と肌がいつぺんに近づいてきた。

だからだろうか？ ついつい、フウルウは早口になってしまふ。

「あれは本当に事故だったんだよ。まあ、がむしやらに踏み込んだら、脚が壊れると予想していなかったといえば嘘になるが、試さずにはいられなかった。格闘戦に持ち込んだのも同じ理由さ。生まれて初めて手に入れた圧倒的な筋力に興奮していなかったという嘘なる。私もオトコノコだから」

「三十過ぎの？」

「心は常に少年だよ」

「身体だけ大きくなっても、中身は餓鬼ですもんねー」

「……言ってくれるな」

フウルウは反論しようとして——やめた。ここでムキになっていても仕方がない。言葉よりも行いで示すしかない。餓鬼か否かを判断するのが、デイナーザードである限りは。

自分の中にディーナザードに認めて欲しいという願望がある以上、主導権は常に向こうにある。

そう考えて、口を噤んでいると、ディーナザードの方が痺れを切らした。

「同名の別人かしら？」

突如、変わった話題であったが、それが鶴の師母についてであることは瞭然としていた。予見していた質問でもある。

「神仙気取りの隠者の騙りだろうね。常識的には」

フウルウの提案をディーナザードが受け入れたのは自然な成り行きに見える。鶴の師母への尊敬の念が相当強いらしいことはディーナザードにも感じ取れた筈だ。鶴の前でこの話題をするのには慎重になるのは無理もない。

だが、この小娘は婉曲な表現と率直な意見を好む。本気で疑わしいと思えば、本当に言わねばならないと考えたならば、例え鶴の前であろうとも、ずけずけと言っただろう。それがディーナザードの美質だ。そして、それを言わないということは、心のどこかで信じている証拠だ。尋常ならざるものを立て続けに見せつけられ、やはり揺らいでいるのだろう。

「……常識はずれの話かもしれない？」

「微妙な所だな」

「でも、女媧娘々っていったら、あの建国の四聖《賢者》ミンガラムの直弟子であるあ

の女媧娘々でしょう？……いわゆる《黒衣の魔女》」

ムブデイウリイリヤハラー アーリム
アルシヤイターナ・カパー・アズワド

「相変わらず、そんなことばかり詳しいな。この算術オタクめ」

「とにかく、その女媧娘々が生きていうっているの？」

「まさか、鶴によると、半年も前に死んでいるらしい」

「そういう次元の問題じゃないでしょう。女媧娘々は……」

氏名を鵬翦、字を雛子、号を女媧。あるいは《黒衣の魔女》。

アルシヤイターナ・カパー・アズワド

ミンガラムと共にアツザフル帝国初期を代表する探究士——今という博物学者だ。名前からわかるようにフウルウと同じ《夏の国》からの移民者と言われている。そして、特に理数分野で凄まじい業績を上げた人物であり、算術好きのディーナザードにとっては崇拜の対象だった。なにしろ、微分積分、二項定理、複素数とその平面投影法等々、ディーナザード好みの数学分野だけに話を絞っても、女媧娘々の業績はまったく枚挙に暇がない。また、生物や化学の分野でも多大な成果を上げ、現代細胞学などはほぼ彼女の独壇場といえる。当然、大変な有名人で、学問を嚙った人間ならば、その名を知らぬ者はいない。だが、

「その女媧娘々は二百年も前の人間でしょう？」

「その通りだ」

女媧娘々がアツザフル暦一年生まれとすると、生きていけば、今年で二百八歳なのだ。半年前に死亡していたとしても、享年二百七歳である。長寿とか、長命とかそういう次元の問題ではない。まるきり神話の世界の話だ。

「意見はもつともだと思ふ。ただね……」フウルウは直言を避けた。「鶴の言葉使い……妙に古めかしいだろう？」

「たしかに、あなたよりもずっと綺麗ね」さりげなく嫌味を交える所がディーナザードら

しい。「でも、それはその師母殿が御年配の方だったっていう事じゃないの？」

「そういう次元の古さではないんだ。例えば、あの娘、普通なら、助動詞や副詞を使うところも動詞接尾辞で表現するよね」

「…普通なら『歩く事を強制するものが存在していることは無い』のところを『歩かされない』とか、言ったり？」

「ああ。確かに後者の方が優美だ。多分、こっちが本来のアツザフル語だろう。けど、前者の方が規則性を保ち易いし、覚え易いし、意味を取り違える事もない。だから、アツザフル帝国内の移民者の割合が——まあ、もともと、アツザフル人自体も移民者の複合集団なんだけど——高くなるにつれて、後者がより用いられる様になった。なにしろ、活用を多用する言語の修得は、助動詞や副詞を多用する言語に比べて、一般に難しいからね。屈折語から、孤立語へ流れはある種の必然なのさ」

「そういえば、先生は時々活用が変ですね」

フウルウはムツとしたが、あえて反論しなかった。それにフウルウの活用が下手なのは残念ながら事実だ。フウルウの母語は活用の概念そのものがまったくない『完全孤立語』とでもいうべき言語体系なのだから、仕方ない——と、弁解したいところだが、他の『夏の国』出身者のアツザフル語を考えると、単にフウルウ個人の言語能力の問題なのかもしれない。

「とにかく、現代アツザフル語というのは、古典アツザフル語のいくつかの活用が省略とどうか、いいかげんになり、かわりに助動詞や副詞が多く用いられる様になっている。しかし、逆にアツザフルへの移民者がまだ少なかった建国初期——つまり、女媧娘々がウルルに所属していた頃——は、まだ古典アツザフル語の残滓があつたわけだ。ちなみに、名前からわかるだろうし、算術好きな君なら知っているだろうけど、女媧娘々も私と同じ、『夏の国』出身だ。が、私とは違って、古典アツザフル語は完璧だったらしい。…：：：鶴の様に」

ディーナザードは口を噤む。

「発音の面でも鶴のアツザフル語には古い特徴が多い。鼻音の発音が弱いし、舌先振動音と口蓋垂振動音の違いが明確だ。ああ、あと、男性形と女性形の厳密な区分もだな。流石に語彙に関しては、人名を始めとして、昔から外来語が多いからあまり判断材料にはならないけれど、結構古語が混ざっている。…：：：そして、それを鶴が話しているという事は、鶴を育てたその師母もほぼ同じ言葉を話しているということだ」

物言わぬ金色の双眸はフウルウの次の言葉を待っていた。

「それと、これは君も気付いているだろうが…：：：鶴のあの黒い法衣」

「…：：：精霊結晶カミシロの繊維よね」ディーナザードの声が自然と低くなる。

「そう、いわゆる神御衣カムミツというやつさ」

フウルウは自分のために茶を入れ始めた。

精霊結晶の商業規模生成自体、かなり複雑な手順を踏まなくてはいけない。極めて高い精霊密度の空間で、一定以上の干渉力の持ち主が、専門の化学器具を用い、複雑な祝詞を

精密な言霊で詠唱し、ようやく生成できるのである。建国ムンデイウレイチャハラの四聖である祝融の制定した巫術免許法による言霊及び祝詞に関する知識の一般開放と、同じく建国ムンデイウレイチャハラの四聖であるミンガⅡラムが発明した珪素媒体式電気誘導法のおかげで、帝国建国以前の様に上流階級の独占品ではなくなったが、それでも綿や絹と同様に高価な代物である事に変わりない。

農業条件は芳しくなく、埋蔵資源に富んでいるわけでもなく、交通の要でもなかったアツザフル中央政府が精霊密度の高いナイル平原を押しえたことで、常に経済的勝者であった事実をみれば、その価値の普遍性と重要性は自明の理である。

加えて、一般に普及したといっても、それはアツザフル帝国の中の話だ。一步その外側に出れば、庶民の中には一生、目にする事もなく死んでゆくものも珍しくない。

そして、その貴重な貴重な精霊結晶を繊維状に生成して、衣類——これを神御衣カムミンという——を作るなど、相応の費用がかかる。技術の面でも一流の巫術師数名と極めて高度な設備、高い精霊密度と時間が必須とされる高級品なのだ。

しかし、神御衣にはその値段に釣り合うだけの価値がある。素が精霊結晶なので、状況に応じ、その分子構造をある程度とはいえ調整できる。通風性や通湿性、触感、断熱性、防水性、防塵性、耐久性、さらには防刃性まで変化させられる。つまり、身に纏っているその場でこの世に存在する多くの繊維の特性を再現でき、高温多湿の熱帯地方から、低温乾燥の冷帯地方まで、幅広く使える万能の衣なのである。また、精霊としても生きていながら、自己修復機能もある。およそ、着衣という着衣の中でこれを上回るものはないだろう。

一般の精霊結晶加工品——例えば、光り物とか人切り包丁とか——よりもはるかに素晴らしいとフウルウは考えている。実際、富裕層に限るが、旅人の外套として、多く用いられる。

ミナレットの様に過酷な砂漠を越えてやってくる者が多い村では結構目にする機会に恵まれている。その隊商宿ハシの主であるディーナザードは尚の事だ。フウルウ程でないにせよ、知識もあった。何より、精霊で出来ているのだ。触った瞬間にわずかだが反応を感じ取れた。

「でもさ、あの娘は結構育ちが良さそうだし、神御衣の一着くらい購入する経済力を持っているても、おかしくないんじゃないかしら？」

十二の少女がそんな衣に身を包んでいるのは確かに奇妙だと、ディーナザードも思う。しかし、鶴ちゃんがフウルウの故郷よりも更に西からはるばるやって来た事を考慮すれば決して異常ではない。それだけの長い旅路を快適に歩むのなら、普通なら幾つもの衣を持つていなければなるまい。だが、万能着衣と呼べる神御衣なら、その衣類の数を大幅に減らせる。買い替え等々を考えれば、高級品の神御衣の方が安上がりかもしれない。それに何より持ち運びに便利だ。加えて、鶴ちゃんは巫術師である。巫術師なら、己の能力向上のために精霊結晶の塊である神御衣を持ち歩きたいと考えるのは自然なことだろう。

「いや、あの神御衣は市販品ではない」

「え？」神御衣が市販品でないことよりも、フウルウが服飾について語ることの方が、ディーナザードにしてみれば奇妙だった。「まあ……そりゃ、神御衣はほとんど特注品だけど……」

「言い方が悪かったな。あれは無料配付品というか支給品だ」

「支給品？」

「ウルルだよ」

フウルウの簡潔な言葉はディーナザードを了解させた。

探究者の聖地《ウルル》。

帝国暦五年にミンガラムが——実際には丞相である祝融の意向だろうと、フウルウは考えているが——要請し、初代皇帝によって設立された皇帝直属の学術機関。未だ帝国の眼が及びきらぬ《丸い大地》の裏側に想像を絶する文明が存在しない限り、間違いなく世界最大最高の学舎であり学会であろう。

鸞翔鳳集たるこの組織には、文字通り世界各地から数多の俊英が集められ、数え切れないほどの発見、発明がなされた。『世界の賢者と英知の財産はここに結集せり』とは暴言であつても妄言ではない。たしかに二百年の歳月は彼の学術機関の規模と性質を変化させた。しかし、それでも、フウルウのような知識人たちを遠く《夏の国》からもアツザフルに引き寄せたその魅力は軽視できるものではない。

そして、この機関に所属する探究者達には在学証明として神御衣が無料配付された。高価な神御衣が惜し気もなくばらまかれるだけでも、ウルルの権勢とその知的財産の貴重さが推し量れよう。そして、この神御衣は長い歴史の中で小さな変遷を繰り返してきたが、基本的な意匠と色彩は創立時と変わっていない——とフウルウは語った。

ウルルの神御衣は八種類。最下級探究士には《白》一色の外套、そこから、アルリアハマル《赤》、アルリアフツァレー《橙》、アルリアスファル《黄》、アルリアクマダル《緑》、アルリアスラウ《青》、アルリアウルシコネー《紫》の六階を経て、最高位に至ると《黒》一色の法衣が与えられる。

捲し上げた跡がほほえましい、ゆったりとした暝天の法衣——あの鶴ちゃんの神御衣は元々、ゆったりとした作りになっているし、小柄な鶴ちゃんが着ているから、余計にぶかぶかに見える。だが、十二の少女が縫い上げもしないでも着られる大きさである。

「あの娘さ、あの神御衣を一番上に着ているんだ。必ず一番上にね。よく考えろ。わざわざ神御衣を常に表に出す必要はない」

訝しむフウルウが尋ねると、少女ははにかみながら、こう答えたという。

『これはお師匠様が十代半ばの頃、着ていらつしゃったものであり、私が《夔》と契りを交した時に頂いたものです。そのため、この衣を朝夕着たり脱いだりする度にお師匠様に会うようで嬉しい気持ち覚えるのです。だから、これを着ていると、お師匠様に少しでも近付けるような気になります』

「……と、どこかで聞いたような話だけど、これが事実なら、鶴の師母は十代半ばの頃にあの神御衣を手にしたことになる。まあ、ちよつと年齢差があつてもおかしくはないが……」

「三十路過ぎの男が鶴ちゃんの言葉使いを真似ると不気味ねえ」

「そして」少し声を大きくして、フウルウは茶々を遮った。「あの神御衣が女性用であることと、鶴が捲し上げるだけで使える大きさであることを考慮すれば、確かにあの神御衣は十代半ばの女性向けといえる。十代半ばでウルルの最上級探究士になり、黒い神御衣を手にした人間は史上唯一人だということは君も知っているだろう？」

「……」

「さらに付け加えれば、その史上唯一人の人間の成し遂げた山程の功績の中には、恒常的

半固着化状態の表現型可塑性精霊結晶細胞の開発もある。そして、その細胞ユニットを彼女はある創世神話から《女媧泥ユニット》と呼んだ。よっぽど、そのユニットが気に入ったんだろうな。それを己の号（称号）にも用いた」

故にその者の号は女媧。

「……つまり」デイーナザードはあくまでも慎重に言葉を紡いだ。「もしも、その師母が女媧娘々を騙っているんだとしたら、相当手がこんでいる……と」

「ああ、私としてはぜひ会って見たかったね」

フウルウは湯気が消えて、彼好みの温度になった茶に手をつけた。フウルウは決して授業中にものを口にしない。液体を口に含むことが『最早、語るべきことは何もない』という無言の表明であることをデイーナザードは学生時代の経験から知っている。

「で、どうするつもり？」

「どうするって？」フウルウはこともなげに答えた。「判断材料が少なすぎるし、鶴に問い質したいことは私にもまだ数多ある。今後のことは鶴の容態が落ち着いてからさ」

すると、デイーナザードは至極真面目な顔で、「……やっぱり、先生は幼女趣味だったんだ」

「……どういうことだ？」

「一生あの娘の下僕^{アポド}として生きていく運命をあつさり受け入れるなんて、愛以外のなんだって言うのよ？」デイーナザードは厳しい視線をフウルウへ向ける。「でも、そんな教育上好ましくない真似をあたしは許さないわ。このデイーナザードが鶴姫命の純潔を守る騎士になる。そして、純潔の姫君と忠義の騎士は甘く切なく初々しく深く澄み切った肉欲と情欲にまみれた『ひゃうつ、に、デイーナザードさん？』『ふふ、鶴ちゃん、お姉さんとイコトしようね』てな感じの愛に……」

「……一応、断っておくが」最早ツツコミを入れることすらなく、フウルウは答えた。「別に私は一生あの娘の下僕^{アポド}というわけではないぞ」

「へ？ そうなの？」

「私のように狭量な男がそんなこと認めるわけがないだろう」

現在フウルウの生理機能の代行をしている精霊を今度は逆にフウルウ自身の細胞に置き換える算段は鶴の中で既に立っている——ということをフウルウはデイーナザードに説明した。フウルウの細胞の再生能力が失われている部位、あるいは下手に置換すると生理機能に重大な疾患を引き起こしかねない部位については、現在、フウルウの体内で活動している精霊をヒト型細胞形態のまま、固着させた後に、フウルウ自身の神経を繋げばいい。『慣らし』に結構時間がかかるだろう。しかし、それは骨折で長い間寝込んでいた者が再び二本足で歩けるまでに時間がかかるのと同じだ。一人でじっくりやればいいのだから、問題ない。どうしても、すぐに動かしたいのならば、運動神経ではなく、巫術で直接動かしてもいい。フウルウもまかりなりにも高等教育を受けている。専門ではないとはいえ、言語巫術もある程度扱える。技術的にはかなり高度だが、基礎が出来ているのだから、後は鶴の手ほどきに従って、丸暗記すればいい。感覚神経については精霊を利用するのは危険なので、しばらく痛覚が抜け落ちてしまうが、これはフウルウの注意でどうにでもなる（実際今も似たようなものなのだ）。そして、そんな部位は少なく、ちよつと時間をかければさらに少なくできるはずだ。

「ま、鵠がしくじっていたら、話は別だがね」

「ごめんなさい。しくじりました」

「……」

「……」

ぺこりという擬態語すら聞こえてきそうな見事な謝りっぷりを鵠が見せる。

それは、鵠の容態が落ち着いて、フウルウの体を改めて検査した時だった。

一階の食堂に集っているフウルウ、ディーナザード、そして、鵠の三人の顔色はたちまち芳しからざるものへと変わる。

すぐに椅子から立ち上がらなかったのは、フウルウ自身驚いていた。よし、自分の精神はまだ正常に機能している。鵠は最善を尽くしたという信頼と感謝が、己の不条理な——しかし、正直な思いである——憤怒を制御している。

フウルウはなるべく感情を交えないように尋ねた。「で、何年かかる？」

「現在の精霊密度と今後の減衰速度、わたし及びフウルウさんの巫術能力の向上、栄養状態、肉体運用の程度、あと……」

「で」フウルウは鵠の説明を断ち切った。「何年かかる？」

この問いが理不尽だということはわかっていた。鵠の本音を言えば『よく、わからない』となる。鵠自身初めての経験なのだ。正確な数字を出せといわれても無理である。仮に『〇年』と言うのは簡単だが、的中する可能性は低い。その場の雰囲気や適当なことを言えるほど鵠は無責任ではない。だから、フウルウのために最大限の努力をして、なるべく正確な説明をしようと心がけているに過ぎない。

しかし、フウルウにしてみれば、そんなことは言っていられない。このことは確実に今後の人生を大きく左右し、早急に下さねばならない決断が数多くあるのだ。長々とした説明は後回しにせざるをえない。

「……六年、前後に三年というのが現段階での概算です。無論時間を頂ければ、この数字はもっと正確になりますので、逐次変化します」

「六年っ？」

限界だった。フウルウは完全に冷静さを失った。容赦ない怒鳴り声と共に、彼は鵠の胸倉を掴み上げていた。

「六年だと！ この俺がか？ 俺が貴様に六年も！」

「フウルウ！」 明らかな叱責の声。

「黙ってるっ、ディーナザード！ 貴様には関係ない！」

フウルウは窘めるディーナザードに刺々しく吐き捨てた。振り返った鵠へは明らかな嫌悪と侮蔑を隠そうともしなかった。

「そうですか、そうですか、この俺は六年も鵠姫命様の下僕として仕えねばならないのですか……！」

「下僕といっても、定期的に簡単な検査と施術を行うだけ……」

「ふざけるな！ それは俺が六年間も君のお守りをしなきゃいけないことだろう！」

それとも何か？ 君はあの訳のわからない仇討ちを諦めてくれるのか？ それでなくとも、貴様のようなガキと毎日顔を会わせるなんて……」

ばしゃ。

ディーナザードが手近にあった杯で、いきなりフウルウの顔に水を引っ掛けた。

「何をする！ ディーナザードっ？」

「頭、冷えた？」

その杯を刃のようにフウルウに向けて、ディーナザードは穏やかに嗜めた。

「貴様は……ひぐっ！」

今度はディーナザードを怒鳴ろうとしたフウルウだったが、いきなり喉を押さえて咳き込み始めた。興奮のあまり、肺に再び水が入ったのかもしれない。

「だから、頭が冷えるかなーと」

軽く、しかも、冷たく言い放つディーナザード。さすがに鶴も何か言い返そうとすると……、

「いや、いいんだ」と、フウルウが手を伸ばして、鶴を制した。「ありがとう。ディーナザード」

「どういたしまして。先生」

ディーナザードはニコリと微笑んだ。

少し、一人にさせてくれ。そう言い残して、フウルウは二階に上がって行った。その後、二人の間に生じた沈黙を先に破ったのはディーナザードだった。

「ごめんねー。鶴ちゃん。いきなり怖い顔しちゃって」ディーナザードは既に鶴が見慣れた笑みを浮かべた。「先生はさ、冷静ぶっているけど、熱くなると止まらないのよ。だから、ああいう時はちよっと過激なことをするべきなの」

「……熱くなり易いというのはわかります」

鶴が見てきただけでも結構そういうところがある。

「ま、だからこそ、あたしみたいに冷笑するしか能のない人間とは一線を画しているんだろうけれどね」

少しばかり真面目な顔をしたディーナザードに、鶴は不思議な疎外感を感じた。

「でも、ディーナザードさん。そのフウルウさんですが……あの人の置かれている状態はまともではありません」

「ま、そうでしょうね。傀儡の術による生理的な影響はわからないけれど、心理的な影響だけでも相当酷い状況だわ。いわゆる一つの心神耗弱？」

その通りだ。それに加え、実際、鶴は生理的にもフウルウの脳は異常な状態であることを鶴は熟知している。

「だったら、何故あんなことを？」

そんな相手にあそこまですることはない——と、言外に尋ねた。

ディーナザードは深刻な声で、「……実はね、先生は被虐趣味なの」

「そ、そうだったんですか？」意外な展開に鶴は驚く。

「そうよ。これは秘中の秘。先生には言わないでね」デイナーザードは鶴に耳打ちした。――珍しいことにいやらしさなど欠片もない挙措で。「今でこそ燻っているけれども、あの人は、高潔にして高慢、孤高にして孤独、そして、虎狼の志を宿している。故に己は自戒と自制を重ね、あたしには苦言と諫言を求めている」

だから、デイナーザードはフウルウに厳しい。先程の制止も、鶴が不当に糾弾されたと思っただけではない。金色の双眸は残酷な瞋恚を宿したままそう語った。

「先生の手前、ああいう態度をとったけど……本来あたしはあの人の方に同情すべきなのでしょうね」

そして、デイナーザードはささやかとはいえ、あれがこの村唯一の教師であり、シャービス亭の金蔓なのだからと、付け加える。

思わず、鶴は黙って俯いてしまった。すると、しばらくの間をおいて、

「鶴ちゃん。一緒にお風呂入ろう」

デイナーザードは嫣然と微笑む。

ちなみに村唯一の隊商宿であるシャービス亭は、村唯一の公衆浴場も兼ねていた。

「ここはやはり蒸し風呂なのですか？」

「そうよ。がっかりした？」

「……すいません。風呂といえば湯船につかるもの――という先入観がわたしにはありません」

「ははっ、これでもあたしの代で豪勢に改築したんだけどね――」
鶴の失言もデイナーザードは磊落と受け容れた。

実際、村の規模からすれば、蒸し風呂のみでも立派な公衆浴場だろう（過剰設備とすらいえる）。何しろ、更衣室を見渡しても人影はない。預かっている着衣もない。真正正銘、鶴とデイナーザードのみ。二人きりで話をするには都合がいいが、ちゃんと投資を回収できると不安にもなってくる。

そんな事を考えていたら、デイナーザードはもう己が粗衣を籠の中に納めていた。

――この女性、服を脱ぐのが凄く早い。

いつの間にか脱いだのか分からぬ程の早さである。しかも、一糸まとわぬ姿になったデイナーザードは背を壁に付け、腕組みをして、鶴の着替えを待っている。

堂々と全裸だ。

その姿は端的に言って……かっこいい。

服の上からも薄々分かってはいたが、デイナーザードはやはり凹凸の少ない体つきだった。乳房ですら、ツンと上向きに突き出している程度で、齡十二の鶴から見てもささやかなものだ。

だが、その腰のくびれは十二分に女の形をしており、しかも見事に引き締まっている。すらりとした体幹やしなやかな四肢も相成って、色気よりも凛々しさが……

「何、鶴ちゃん。あたしの身体をそんなに見たいのー？」
「し、失礼しました」

見とれていたのです——とはさすがに言えない。
鶴も己の法衣に手をかける。だが、そこから進まない。ディーナザードに見られていると思うと気恥かしいのだ。よくよく考えれば、同性とはいえ師母以外の人間に肌をさらした経験がほとんどない。

それに……ディーナザードの裸身に比べ、鶴のそれは……悲しくなるくらいちんちん・んなのだ。背が低いのは幼さ故に仕方がないが、その割に身体が帯びてきた丸みを、鶴は好きになれなかった。全体的にはまだまだ華奢な肉付きであったし、乳房も膨らみ始めたばかりだ。清婉な裸身を誇った師母には程遠い。だが、ディーナザードのような清麗さもない。

そんな未成熟で中途半端な身体をさらけ出すのは惨めだ。

とはいっても、自分はあるだけ凝視しておきながら、ディーナザードに『恥ずかしいから、見ないください』とは言えない。

鶴がそんな風に悶々としてしていると、ディーナザードは

「じゃ、あたしは先に入っているわね」

と笑いながら、先に浴室に入っていく。

……勇気のなさが一番カッコ悪いのだと鶴は思い知らされた。

湯船はないにせよ、旅路において、入浴の機会は貴重である。

蒸気でたっぷり汗を出した後、頭から水をかぶると……これはたまらない。

落ち込んでいた鶴も、疲労が抜け落ち、緊張がほぐれるのを実感した。

そんな鶴の前に、コトン……と果汁水入りの杯が置かれた。顔を上げると、ディーナザードの手には葡萄酒^{ナベリーズ}入りの杯があった。

——うう、素晴らしいです。

まさにこの世の天国、普段なら遠慮するところだが、鶴は一も二もなく果汁水^{シャルバツト}に口を付けた。

「先生が何でこんなところにいるか知っている？」

「え……」鶴は間の抜けた返事をしてしまう。

ディーナザードも葡萄酒^{ナベリーズ}を飲みながらだったが、この話が本題である事は明白だった。「アツザフルの出身じゃないことはわかるでしょ？」

「はい。《夏の国^{シエ}》の方でしょう。立ち振る舞いや言葉遣い、何よりあの教養を鑑みるに、結構な名門の出とお見受けしますが？」

「うん。そうらしいね。なんでも太史令の長男で、自身も科挙に合格したんだって」

その一言に、今度は鶴が「……！」と果汁水^{シャルバツト}を咽喉で詰まらせた。

「だ、大丈夫？」

ディーナザードは手を伸ばしかけ、鶴は「いや、ちよつと驚いて」とそれを止める。そして、息を整えてから、一気に言葉を繋いだ。

「でも、それって、とんでもないことじゃないですか。大体、太史令って、あの太史の令——すなわち長の意おきでしょう。しかも、既に科挙に合格していたって……虎榜に名を連ねたということですか！」

「へえ、それって。そんなに凄いことなの？」

「どうやら、シヤ夏の国シヤに詳しくないディーナザードには、それがどれだけの意味を持つか、わかっていないらしい。だから、鶴は啞然としつつも、力強く頷いた。

「ええ。凄いことです」

太史といえば、シヤ夏の国シヤでは、天文、暦法、歴史を司る官僚を指す。アツザフルに比べ、演繹的思考法には弱いのが、深遠な人文哲学を誇るシヤ夏の国シヤにおいては重職である。かつては天文を主とする聖職者であり、次に暦法という時の管理者ともなり、今では歴史の記述者——言わば、事象の決定者——として、太史たちはその辣腕を振るい、また、尊敬を集めている。まして、その『太史』の長（令）である太史令ともなれば、国家の重鎮だ。そんな太史令を輩出する家ともなれば、名門中の名門といっても過言ではない。

「あ、もしかして、フウルウさんが今歴史学者を志しているのは、その辺りの影響ですか？ フウルウさんの生家には史書が山ほどあったでしょうし、実際にフウルウさんを薫陶した親が太史令ならば、フウルウさんは歴史の話を子守唄のように聞いていたのかもしれない」

「うん。多分それで正解ね。小さい頃から、歴史漬けにされてきたと言っていたわ。苦笑いしながら、語っていたところを見ると、本人も嫌ではなかったみたい」

「それで、科挙にも合格ですか……。今、フウルウさんが三十そこそこということとは、相当の若さで受かったんでしょう。恐ろしい俊英です。紛れもない神童の類ですね」

「あたしにしてみれば、鶴ちゃんの方が凄いなれど……。科挙に合格って、そんなに凄いなんだ？」

「はい。あの国で科挙に合格すれば、それだけで勝ち組です。ただし、それだけに合格するのは至難の業です。はっきり言って、合格した時点でどんな人間でもほぼ一生安泰です。ですが、合格するまで勉強するのも一生かかったり……。下手をすれば、一生受からなかったりもします。能力不足でも将来の可能性が評価されれば合格しうるシヤウルクシヤとはそこが違いますね」

「へ、へえ」

ディーナザードの顔色がちょっと変わった。鶴の真剣さが伝わったのだろう。ついでに『あいつ、実はそんなに凄いヤツだったんだ』とでも考えているのかもしれない。

「で、でも、まあ、先生は金持ちの息子だったんでしょう？」

「科挙ではそんな家柄や血筋なんて、考慮されません」

藁にすぎるように同意を求めるディーナザードの猫なで声を鶴は断ち切った。

「乞食も金持ちも、皆等しく機会を与えられます。勿論、お金がなければ、勉強したい時間も食べるために働かねばなりませんし、勉強するための書籍を購入するのも難しくなります。ですから、完全に平等というわけではありません。フウルウさんのように小さい頃から、自然と勉学に励める環境にあった人はやはり有利でしょう。しかし、それはフウルウさんの実力を否定するものではありません」

「ふ、ふーん。なるほどねえ」

ディーナザードは何やら遠い目をしていた。どうやら、彼女はフウルウについてやや過小評価していたらしい。もつとも、フウルウがあれで謙虚な男であることは付き合いの浅い鶴にも理解できる。おそらく、彼女の無知は彼が自慢話を避けた結果だろう。

「でも、だったら、何故、こんなところにいるのかがわかりません。フウルウさんは勤勉で実直な方ですし……、母国では、あの方を必要としている方が大勢いらっしゃるのでは……」

素朴な疑問を提示した鶴に対し、ディーナザードはクツクツと嘲りのような笑みを見せる。思わず、鶴の中に苛立ちが芽生えた瞬間、年上の女性は葡萄酒を飲んだ。かなりの勢いである。鶴の師母も葡萄酒を好んでいたが、こんな飲み方をしているところは見たことがない。

そして、一気に酔った口調で彼女は語った。

「……本人は党争に負けたからだと言っている。政争に負けたわけではないともね」

党争とは党派による争い、政争とは政論による争い、といったところだろうか——鶴は頭の中で解釈した。

「あ、勿論、あの男だって、三十過ぎているからね。自分がかなり愚かなことを言っていたことは自覚しているわ。実際、この発言だって、嫌いなお酒を付き合いで飲まざるをえなかった時にぼろっとこぼれた言葉で、本音かもしれないけれど、本意ではなかったと思う」

「……そのどこが愚かなのですか。政争に負けたわけではないということは、フウルウさんの主張そのものは正しかったということでしょう。正しいことを言ったのに認められないなんて、悔しいに決まっていますじゃないですか」

ディーナザードはせせら笑うように言った。

「鶴ちゃんはまだ子供だからねえ」

「そういう理屈って、卑怯だと思えます。フウルウさんはそんなこと絶対に言いません」

「……鶴ちゃん、厳しいことを言わせてもらおうとね。それはフウルウの誠実でもなければ、鶴ちゃんへの理解でもないわ。単にこの三十過ぎの男が十二歳の子供と同じ精神性しか持っていないという証なのよ」

「十二の幼子の精神性のどこがいけないのですか？」

鶴は自分の口ぶりが棘を帯びていることを自覚した。一方のディーナザードは赤子をあやすような口ぶりになっている。

「鶴ちゃん、恋をしたことって、ある？」

「まさか。わたしはお師匠様一筋です」

「そういうこと。偉そうなことを言わせてもらおうとね。あなたはまだ心から他人を求めてはいないのよ」

「……どういう意味です？」

「うーん、例えば、鶴ちゃんのお師匠様は自然哲学者であって、人文哲学者ではなかったわ。勿論、あの方のずば抜けた才気は政治や芸術においても、十二分な成果を残している。

けれど、やはり、その本質は数学や物理、生物化学……最も先験的^{ア・プリオリ}な、いつてみれば、究

極^{ロギス}の論理^{イデア}、真理の探究にこそあったでしょ」

「はい」

「そして、おそらくはあなたもそちらに重点を置いている」
「ええ」

「ただどね、鶴ちゃん。そういった論理や真理の探究は人の心を対象にしていないのよ。将来的にはともかく、少なくとも現段階ではね」

「それは認めます。人の心、精神や知性は極めて複雑な電気化学的ネットワークによる産物です。混沌理論でしたか？ 今の我々にそれらを自在に予見し決定することなど、到底不可能です。観測技術と処理能力、そして、それらを解析するための偏微分方程式が足りません」

「そう。二百年前にあなたのお師匠様によって……いえ、とにかく微分が発見された時には、それも近いうちに可能と言われていたけれどね。今となっては甘い見通しだったと言わざるをえないわ。流体の運動や生態系の変動に見られるように、初期条件によって以後の運動が一意に定まる系においても、初期条件のわずかな差が長時間後には大きな差を生じさせ、実際には結果が予測できない現象がこの世には満ち溢れている」

「電磁力学の分野においても従来機械論的決定論の通用しない分野が出現しつつありますしね」

「おまけに精霊が減びつつあり、従来のような彼女達を使った生物化学分野の実験が徐々に難しくなっている現状も考慮すれば……」

「人の心については演繹的手法による自然哲学的な働きかけよりも帰納的手法による人文哲学的な働きかけを重んじるべきでしょうね。そもそも、人間心理というものは創発現象の典型であり、還元主義が最も苦手とする分野ですから。——それはわかります。だから、それがどうかしたのですか？」

「つまり、政治や芸術を含む人文哲学というのは、人の心を探るための術であり、人の心を掴むための術だということよ」

「………」

「そして、ピャオ・フウルウは人文哲学者なの。歴史学者を志すものであり、経済学者であつたものであり、そして政治家になろうとした者なの……。だけど、先生に人の心がわからない。わかるうともしない。挙句の果てにわかるうとしない己を正当化しようとしている節がある。あたしは何年かあの男を見てきたけどね、そういった自己正当化は自己陶醉と同義であり、あの男の中に卑しく蠢いているものの中でも特に醜いものよ。勿論、相反する心理もあるのでしようけれどね」

「……だから、フウルウさんは愚かだと。学者として、失格だと？」

「実際、芽が出ていないわ」デイーナザードは酷薄に断ずる。「最初の話に戻るとね」

党争に負けるのも、政争に負けるのも、畢竟、同じことである。デイーナザードはそう指摘した。党争に負けたというのは多数派の形成にしくじったということだ。それはつまり、多くの者の心を掴めなかったということなのだ。

どんなにフウルウの政策が素晴らしいものであっても、それが人の心の望みと離れていれば、それは意味がない。何故なら、その善し悪しは人の心が決めるからだ。

独り善がりでは駄目なのだ。

先験的な論理ならば、この手の問題は起きない

正しいものは、人の共感など呼ばなくても、正しい。そして、現実がそれを裏付けてく

れる。重力の存在が認められずとも、物はやはり上から下に落ちる。火薬の威力を認めぬ者も、鉄砲で撃たれば死ぬ。

アリボステリオリ、バトス
後驗的な感情においてこそ、この手の問題が起きる。

人は腹いっぱい飯を食べられる世の中になったとしても、世界に不満を抱くことをやめない。あるいは、腹いっぱい飯を食べられる世の中にする為政者よりも、飢え死にが蔓延る世の中にする為政者を望むことも、たしかにありえるのだ。

「フウルウには選択肢が二つあったわ。一つは所詮人間自分のみが大切なのだと、他者との関わりを避け、隠者となる道。一つは世の価値判断そのものをひっくり返す道」

「いずれも難しい道ですね」

「ええ。特に後者の場合、ひっくり返す過程に多くの人間の賛同を必要とするわ。結局、人の心を把握せねばならない。そして、それが先生には出来ていない。そりゃ、あたしの心を探らなくたって、他の大多数の心を掴めれば、まあ、問題ないんだけど……一番身近にいる人間の心をわからない奴にそんなことができるのかというと、見込みは薄いとか言いようがない。勿論、先生の論文が明日にでも大変な評価を受ければ、あたしが間違っているということになるんだろうし、実際、あの人はそれを期待している節はある。だけど、未だに子供相手に教師をやっているという今がそれを否定している」

「……では、前者の道は？」

ふと、鶴はその道が己の師母の道であったのではと思いついた。

だが、ディーナザードは「力においては可能であったでしょうけれど、心がそれを許容できなかったのでしょうね」と苦笑する。

「生憎、先生は己のみを愛するものではいらなかった、よく言えばね。悪くいえば、他人に認めてもらえねば我慢ならない幼児ということにもなるけれど……。いずれにせよ、あの人はね、己を貫くためには人を好きになっただけじゃなかったの」

——結局、あの人は不器用だけど、最後の最後に人間が好きだということよ。

そんなディーナザードの心の声を聞いたような気がした。

「他人の喜びを己の愉しみとし、他人の悲しみを己の苦しみとする人間……もしかして、だから、あの人は今……」

「先生はね、人との付き合い方を知らないの。ある程度距離をおいた、物質的な利益が大切な人間関係ならば、それは論理が支配している世界よ。政治の世界というのは結構これに近いのでしょうね。だからこそ、政争も党争も、一応は勝負の形になるところまでは持ち込めたらいい。結局は失敗しているといっても、二十代でそこまでいけたこと自体大したものですよ」

なるほど、たまに『青史に名を留めるに値しない』と自嘲するのはあくまでも自嘲なのか。故郷での彼はもう十分『歴史書の隅っこに小さく名前が書かれる程度の偉人』ではあるのだろう。

「でも、わたしとの関係は……」

「うん。それはかなり距離のない付き合いにならざるをえない。冗談抜きで鶴ちゃんを愛さなくてはいけなくなるかもしれない。しかし、そのためには鶴ちゃんの心がわからなくてはならない。でも、おそらく、それは……ね」

ディーナザードは虚ろな目で杯の中の赤い液体を眺めていた。

「理屈ではわかっているんだと思う。あいつは書物を山ほど読んでいるから、あたしの語ったことくらい、同じことを語る他の誰かの物語で、とうの昔に知っているとと思う。そして、自分がわかっていることをわかっているから、それをわかろうと努力している。今、彼が歴史学者を志しているのは、勿論、彼自身が歴史好きであることも一因だけどさ。政治家として、挫折したけれど、そこから完全に離れることも出来ず、しかし冷却期間が必要という人間にとつては便利な立場であるということ——そして、かつてわからなかった人間の心を理解するためには、その実例の集合体として、過去の歴史が有益であるという打算があるのでしょね」

ただし、あたしに言わせれば……とディーナザードは言葉をさらに繋ぐ。鶴は今のディーナザードの異質さが気になってきた。フウルウならともかく、ディーナザードのような社交的な人間が一方的に喋り続けるというのは珍しい。やはり酔っているのかと、鶴は邪推した。

「こういうのは知っていても、身に付いていなければ、意味がないの。そして、これは論理ではなく、感情の問題だから、書物から身に付けるのは難しい。書物は表現媒体として、言葉——論理を用いているから。本質的に感情とは相性が悪いの。大体、もし、それらを完全に論理体系化して、読むだけで身に付ける手法を獲得する程に、人の心に知悉している者がいたら、そもそも、それを書物になんて、残していないって」

「何故です？」

「それはねー」

ディーナザードが手を伸ばす。その先には鶴の髪があった。さらにその指先が鶴の頤から首筋をゆつくりと愛撫し……。

「ひゃ、ひゃう」

「そんなに凄い技術を持っている人は、鶴ちゃんみたいな可愛い女の子を誑かして、あんなことやこーんなことをするのに忙しくて、本なんか書いている暇がないからさー」

「あ、あのあのあの、ディーナザードさん？ 酔ってますね？ 酔っ払っているでしょ？」

「いやいやいや、あたしはいつでも本気だよ」

「だ、だったら、余計に駄目ですよ。わ、わたしにはお師匠様という人が……」

とりあえず、じたばたしようとしたが、あつという間に床に押し倒される。……色々な意味でこれは洒落にならない。

「きゃー、お師匠様ーっ！ 嫌ーっ！」

「無駄あく無駄あく、おとなしくいたただかれちゃいなさないく」

「や・め・ん・か」

その男の声と共に、ディーナザードの頭がいきなり後ろに傾いた。

「痛っ！ 痛い痛い痛いっ！」

後ろには呆れた顔のフウルウが立っていた。その右手にはディーナザードの髪が再び握られている。どうやら、いつの間にかやら、ディーナザードの背後に忍び寄っていたフウルウが彼女の髪を引っ張ったらしい。

——って、ここは浴室で、わたしたちは今裸なんですけど……！！

驚きのあまり、鶴は叫び声さえでない。

ところが、デイナーザードには引っ張られた髪の方が重要らしい。両手で己の髪を抑え（当然色々丸見えなのに当人もフウルウもそれは気にしないという恐るべき状態のまま）舌鋒鋭く抗議した。

「乙女の髪を何無造作に何度もひっぱっているのよ。この犯罪者」

「……ほう、君は乙女なのか？」

「あー、また、そういうこという。酷いわ。鶴ちゃんにも触らせたことなかったのに……」

……今日だけで二度目ですね、これは——というやり取りを始める二人を尻目に、鶴はさつさと自分の黒衣を取ってくる。とりあえず、白い肌の露出が隠しきった辺りで、鶴が「あ、あのフウルウさんは……」

と、向き直ると彼は随分さっぱりとしていた。どうやら、あのまま、本当に顔を洗ってきたらしい。ついでにデイナーザードの助言通り、その中身も冷やしてきたようだ。

「とりあえず、ここじゃ何だ。食堂で話の続きをしよう」

こうしてデイナーザードの魔の手から救われた鶴だが、異様に釈然としない気分で、感謝の言葉は出てこなかった。

「すまなかった」

二人で食堂に（勿論服はちゃんと着て！）戻るとフウルウは開口一番謝罪した。

「本当にすまなかった」

「……いえ、わたしの失態であるのは事実です」

先に述べた通りフウルウは多くの部位を精霊に置き換えた状態にある。そして、この状態でかなり安定している。あと、二、三日様子を見る必要があるものの、その後は今まで通り——いや、傀儡としての力を算段に入れば、今まで以上に——活動できる。ただし、一日一度程、鶴による検査と調整が必要になる。とはいえ、この一日一度というのも、経過によつては、二日に一度、一週間に一度と、間を空けられるようになる。しかも、この検査と調整というのも、定期的にせねばならないものの、作業自体は比較的簡単なものだ。普通なら一日十分もあれば終わるらしい。

並べてみると、たいしたことはない。軽い持病の検診と変わりはない。ある意味、あの大怪我から生還してこの程度というのは、鶴に感謝してもいいくらいだ。

しかし、問題というのはあるわけで……

「その検診期間が、六年というの痛いなあ」

「本当に申し訳ありません。わたしの力量不足ゆえに精霊細胞の侵食とフウルウさん自身の怪我の程度が激しくなってしまうて」

「いや、別に君を責めているわけではないんだ」フウルウは思わず宥めた。^{なだ}「それに、大怪我の後の検診期間というのは不可抗力だ。ただ、六年間、君と顔を会わせ続けねばならないというのは……」

デイナーザードは呆れかかっていたが、それでもほとんど条件反射的にフウルウの服を引っ張った。

「ああ、いや、別に、医者^の検診だと思えば、何てことないのだが……この場合どうして

も私的な人間関係が介在することになるから、その……」
完全に泥沼である。いくら、精神状態がまともでないにしても、よくもここまで、状況を悪化させられるものだ。

「あの……わたしのことお嫌いですか？ 先程も……」

「失言だった。反省している」

「……でも、本心なのでしよう？」

フウルウは戸惑った。

——相も変わらぬ聡明で鋭利な少女だ……。

十を超えたばかりの少女にこういうことを言わせるフウルウに問題があるのだろう。しかし、こんなことはディーナザードに出会った時以来だった。

「……確かに本心だった。ああ、そんな顔しないでくれ。すべては私自身の未熟さに起因している……」

確かに一応フウルウは教師をやっているし、村人からの評判もそれほど酷くはない。しかし、生徒はフウルウの人格に魅かれて、学校に来ているわけではない。フウルウの知識を求め、学校に来ているのだ。フウルウもそれを心得ているから、生徒への態度は（かつてのディーナザードを除いて）事務的だ。それはそれでいいと思う。が、同じ方法は鶴に通じないだろう。

三十路を過ぎて、実に情けない——ディーナザードはそう思っているだろうし、フウルウもまったく同感だった。

「言っておくが、決して、君が嫌いなわけではない。むしろ、憧憬し、尊敬すらしている。でも……」

はあ、と大きくため息をディーナザードは吐いた。「というか、子供に限らず、先生って、同じ人間と六年間も親密な関係を維持できた例があったけ？」

「……両親とは生後二十年以上、良好ではないにせよ、親密な関係だったぞ」

「で、些細なことで、ぶちきれて、出奔」ディーナザードは明らかに皮肉っていた。「流れに流れて《大陸》^{バムト}の反対側アツザフルまで来たわけだ」

別に考えなしで流れて来たわけではない。漠然とではあるが、ウルルで歴史を学びたいと考えてはいた。フウルウはそう反論しようとして……やめた。確かにあの頃のフウルウの考えは、甘く、幼く、そして、独り善がりだった。いや、あるいは今も……。

「そういうえば、鶴ちゃんはどうしてアツザフルに来たの？ この小父さんとは違ってちゃんと理由があるんでしょう。さつきは仇討ちとか、随分と物騒なことを言っていたけれど」

「はい。仇討ちです」

きっぱりと答えた鶴に、その問題もあったかと、フウルウは頭を抱えなくなった。

「ということは……亡くなられたお師匠様って、殺されたの？」

ディーナザードはいささか気まずい思いで尋ねたのだろうが、対する鶴は落ち込む様子もなく、力強く頷いた。

「はい。かの光輝溢れるお師匠様は、あの駄目人間の見本たるアル・イクシルに殺されたのです」

「……あ、アル・イクシル？……それって……」

「ええ、アル・イクシル・ディアウスです。おそらく、無能で菲才で小器で凡俗で愚鈍で怠

情で脆弱で臆病で野卑で貧鄙な醜男である歪んだ性根のアルイクシルが、有能で天才で大器で俊英で鋭敏で勤勉で強靱で勇敢で優雅で高潔な麗女である御心のまっすぐなお師匠様に下らない嫉妬をしたに違いありません。ええ、そうに決まっています。本来ならば、軽々と返り討ちにできるお師匠様ですが、そこは卑劣極まりないアルイクシルです。浅薄なあの方に相応しい恥知らずな手段を用いたのです……多分。まったく、ああいう馬鹿な男ほど手に負えず、かつ、取り返しのつかないことをしてしまおうということなのでしょう。そもそも、あのアルイクシルという完全無欠の究極的駄目人間は、お師匠様と正反対で幼い頃からそれはもう駄目駄目で……」

それから、鶴は、熱く、激しく、とてつもない早口で、いかに師母が偉大で、いかにアルイクシルが駄目人間であるかを長々と話し始めた。具体的には三十分程かけて……。

流石にあの調子で話し続けていると、疲れたのかもしれない。あるいは只の生理現象なのか、鶴は息を荒げながら、「ちょっと、失礼します。すぐに戻りますので」と残して、その場を立ち去った。

残りの二人は特に尋ねることなく、鶴の退出を許した。

「……先生、先生」鶴の勢いに気圧されて、半ば朦朧としたままのディーナザードは小声でフウルウに尋ねた。「あたし、確かアルイクシルの名前も聞いたことあるんですけれど……」

「ほら、アルアイリム・ムラト・アブヤドの賢者スーファイリル・チャハラだよ。《流浪の四仙》にも数えられている」もう半ば、やけになって、フウルウは説明した。

「……ああ、勇者チーシュイの付き人である賢者様ですね」

「いや、賢者アルイクシルの付き人が勇者チーシュイだったんだよ。まあ、世間じゃ、よくあべこべになっているがね。一応、これも授業で教えたぞ」

「そんなの一々覚えていられませんよ。あの連中、大して、個性もないくせに、数ばっかり多くて。しかも、アツザフル人なら、クンヤ通称やらナサブ血称やらラカブ敬称やらで、シヤ夏人なら、諱やら氏やら姓やら字やら別字やら号やらで、いっぱいいっぱいなんですよ。まるで、三流オタク系素人作家の駄作です」

「昔の人間なんて、そんなものさ。とりあえずはアルアイリム・ムラト・アブヤドの賢者アルイクシルとアルシヤイタナ・カパー・アズワドの魔女じよかにやんにやん《黒衣の魔女》女媧娘々だけは把握して置いてくれ」

「まあ、対になっているということ……やっぱり出生時期は女媧娘々とほぼ同じですよね」

「戸籍上は同い年だし、ウルルでは同期だったし、個人的な知り合いだった。いや、正確にはウルルに入学する以前の付き合いだった」

「で、本物？ 本物としたら、こいつも今年で約二百歳ということになるけれど」
 こちらはフウルウにもさっぱりだ。アルイクシルという名前もありふれてはいない。女媧娘々との関わりを鑑みれば、偶然とは考え難い。だが、この辺りはフウルウもまだ鶴から詳しく聞いていない。ディーナザード以上のことはフウルウも知らないのだ。

「はつきりしているのが、裏い掛かってきた連中を鶴ちゃんはサイフ・アルイクシル《アルイクシルの手先》

と認識しているということだ」

「だって、あいつら、それを否定していたわよ。しかも、自分たちは《再生への導き手》である」と主張しているし……」

「それがわからないところなのさ。どうも、鶴は《再生への導き手》について、その存在すら知らないようだ。まあ、今まで、ずっと《根の国》にいたのなら、アツザフル帝国の政治事情に詳らかでないのは当然だ。アツザフル固有の問題ともいえる《再生への導き手》を知らないのは、別に不思議ではない」

「じゃあ、鶴ちゃんの勘違い？」

「断言はしかねるが、誤解があるのは間違いない。鶴が『アル||イクシル』を殺そうとしている以上、『アル||イクシル』としては殺される前に鶴を殺してしまおうと考えても不自然ではなく、そのために《アル||イクシルの手先》が刺客として、このシャービス亭まで、やってきた——というのが、鶴の頭の中にある事態なのだろう。そして、鶴の頭の中では、私に襲い掛かってきた狼たちも《アル||イクシルの手先》の中に含まれているらしい。あれが何らかの生物兵器だったということも、たしかにありえないわけではないが……常識的に考えれば……」

「ただの冤罪」

「……と、いうことになる。なら、あの《再生への導き手》を《アル||イクシルの手先》と鶴が呼んでいるのも同じ理由からと考えるのが妥当だ。鶴自身が聞く耳を持っていないだけでね」

「では《アル||イクシルの手先》など、実在しない……と？」

「そうとも限らないんだよ。鶴の話はずっと聞いていると、最初に《アル||イクシルの手先》に出くわしたのは、このアツザフル帝国に入る瞬間、つまり、国境の付近であり、しかも、ちゃんと人間の形をしていて、アツザフル語を話していたらしい。その後、何度も付きまとわれていたともいう。ただ、あの《再生への導き手》の言葉を信用するならば、途中からは、鶴が《再生への導き手》を《アル||イクシルの手先》の手先と考えるようになったと見るのは妥当なんだろうけれど……」

その時、硬い床に小さな足音が響く。鶴だ。

「……すいません。急に場を空けて」

「「いやいや、別に、構わないよ」」

二人は口をそろえて、そう答えた。できれば、もう少し鶴にゆっくりしてきて欲しかったというのが本音だったぐらいだ。

「ええと……確か、アル||イクシルが探究士を名乗りながら、簡単な微分や積分をするのにも教本が片手にしたがる愚か者という辺りまで話しましたっけ？」

鶴はまだまだ話し足りないようだった。だが、フウルウはやりわりと提案する。

「ああ、鶴ちゃん。実はね、その辺りのことは結構有名な話だから……」

「そうなのですか？」

「アツザフルでは多くの人が知っている」

無邪気に問い返す鶴にフウルウは内心の動揺を隠して言い聞かせた。隣ではディーナザードが『うまいじゃん』と喜色を示していたが、フウルウの言葉は誇張こそあれ、まったくの虚偽というわけではない。アル||イクシル・ディアウスが探究士としてお世辞にも優

秀とは言えず、女媧娘々が探究士としては紛れもなく優秀であったことは、歴史をかじった者なら、誰もが知っていることだ。しかし、だからといって、誰もがアルⅡイクシルに嫌悪を抱き、女媧に好意を抱いているかという点、それはまた別の問題となる。正直、同じ《夏の国》の出身であるフウルウから見ても——というのが、本当のところだったが、それをこの少女の前で口にするには少し慎重にならざるをえない。

「だから、アルⅡイクシルの駄目さについてはもう十分だ」

かなり、突き放した言い方かなとフウルウは思ったが、鶴はむしろ、

「そうですね。アルⅡイクシルほどの希代絶世傾国傾城の駄目人間については万人が承知済みに決まっていますね」

と、微笑みながら、素直に納得し、

「ならば、これでわたしがあのアルⅡイクシルを殺さねばならないということはわかって頂けましたね？」

と、かなり、吹き飛んだ論法を用いた。

デイナーザードもなかなか評価に困っているようだった。フウルウもまったく同意見である。

——聡明。

それが鶴に対するこれまでの二人の評価だった。確かに鶴には、時折、垣間見せる歳相応の幼さがある。《夔》の話になった時に現れる知識の偏りと認識の歪みがある。しかし、それは鶴を形成する枝葉末節であって、この黒衣の少女の根幹たる知性と人格には一定の信頼を置ける。二人はそう判断していた。年齢を鑑みれば、破格の評価だったともいえる。しかし、アルⅡイクシルの話に（正確にはそれに加えてフウルウがこのシャービス亭に来る前に聞かされた師母の話に）なってくると、どうにもその信頼と評価を改めねばならなくなってくる。

しかも、ことは仇討ち、つまりは人殺しだ。デイナーザードはどう思っているかは知らないが、少なくともフウルウは賛同しかねる。たとえ、鶴の言動がまともだったとしても、おいそれと肯定できない。鶴がいかにせん子供であることを考慮すれば——この論法は卑怯なものであることをフウルウが身に沁みてわかっている——尚の事だ。

「しかしねえ、鶴、仇討ちといわれても……」

だが、どういった辺りから、話せばいいのかフウルウにはわからない。

倫理的な問題とか、復讐法は廃止されているとか、君の判断基準が正直怪しいとか、どこからそれだけの罵詈雑言が出てきたのかとか、先刻の説明は感情が籠り過ぎていてわかりにくかったとか、聞きたいことは山程あるが、直接本題に切り込むと面倒になりそうだった。そこで、

「私は君と離れるわけにはいかないだろうか。だから、君があくまでアルⅡイクシルを追い続けるとなれば、私は付いていくしかない。しかし、私にだって、職業があり、生活があり、野心もあるんだよ」

と、結局はフウルウ個人の事情を持ち出した。フウルウに対して負い目があり、かつ責任感の強い鶴には、これが一番、効果的だろう。だが、一方で、これはフウルウにとって問題の先送りでもある。だから、隣のデイナーザードからは『子供相手に尻込みして、どうするんです』と蔑みの視線を向けられても耐えるしかない。

しかし、予想通り効果はあった。

「それについては頭を下げるしかありません」

苦渋の表情で瞑目した後、傀儡使いの少女はただひたすらに頭を下げた。

「お願いします。わたしにお師匠様の仇を討たせて下さい。少ないですけども、持ち合わせがあります。それでフウルウさんの被る損失は補填させていただきます。足りなれば、体で返しますから」

「妙な想像をするなよ、デイナーザード」フウルウは先手を打つ。「これは働いて返すという意味だぞ」

デイナーザードはニヤニヤ笑いながら、「夜伽で？」

「……もう、いい……」

段々、フウルウはまともに相手をするのが嫌になってきた。しかし、何でまた鶴はそんな表現をするのだろうか？ やはり『お師匠様』の教育結果だろうか？ そうなると、女娼娘々はデイナーザードの同類となる。ならば、そんな女のために鶴の未来を削るのは、ろくでもないことだ。

「君の気持ちはわかる……つもりだ。汲み取っているという意味でね」フウルウは突き放す言い方をした。「しかし、どこにいるかもわからないアルイクシル・ディアウスを探して、放浪の旅なんて、正直ごめんだな」

「いえ、アルイクシルの居所はわかっています」鶴は少し意気込む。「アルイマデイナーナト《帝都》ムンダペレから、北北東に約五ファルサク（約三十キロ）のところにアインアルリアド《乙女の泉》と呼ばれる農村があります。その第十三地区八番地に彼はいます」

「……へえ、随分、具体的。先生、これならつき合えないこともないんじゃない？ 御伽嘶の様に、どこにいるかもわからない仇を捜しての放浪の旅じゃないんだし」

ああ、何故この小娘は話をややこしくするのだろうか？——フウルウは思いっきり、デイナーザードを睨み付けてやったが、彼女はへらへらと笑っていた。

しかし、デイナーザードの主張はあなたがち間違いでもないのだ。アインアルリアド《乙女の泉》というのはよく知らない街だが、帝都の近くなら、問題はない。元々、フウルウも時々帝都へ出かけるから、ついでにその《乙女の泉》という村に立ち寄ってみるのも悪くないだろう。勿論、それは立ち寄る事に限っての話であるが……。

「いや、ちよつと待て」フウルウは不可解な点に気付いた。「アルイクシルとやらの、居所を何で君がそれを知っている？」

「お師匠様が言っていましたから」鶴は常套句を使った。

「それはいつだい？」

「……お師匠様が亡くなられる前日です」

鎮痛そのものといった鶴に、フウルウはやるせない気分になった。だが、これから、もつと、酷いことを聞くことになる。

「君と君の師母殿は《根の国》に居たのだろうか？」確認と緩衝剤の意味を込めて尋ねた。

「はい」

「で、その、なんというか」どう言葉を濁すべきか迷ったが、フウルウは思い切って、「師母殿が亡くなられたのはいつ？」

「……半年前です」

鵜は既に表情を変えなかったが、それはこの少女の理性が感情を抑え込んでいることは明白だった。ディーナザードはあからさまにフウルウを睨んできた。

「ちなみに君はここに来るまでどの位かかった？」

「半年です」

その答えは想像がついていた。遠い根の国から、このアツザフル帝国まで——現行の交通網ではその位かかる。

しかし、その答えを聞いた途端、ディーナザードは顔色を微妙に変化させた。フウルウと同じく奇妙な点に気付いたのだろう。フウルウのする予定だった最後の質問は彼女がしてくれた。

「鵜ちゃん、それちょっとおかしくないかしら？ あなたの師母殿が、アルルクシルの居場所が——ええと、《乙女の泉》だっけ？——とにかく、そこだと、証言したのが、半年前。つまり、その時、アルルクシルは《乙女の泉》に居たことになる。ところが、次の日に彼は《根の国》にいたあなたの師母殿を殺害。そして、鵜ちゃん、あなたは《乙女の泉》を目指す道のりで、ここに立ち寄って、その男と出会った。あたしは《根の国》のことなんて、よく知らないけど、これの意味するところは、《乙女の泉》から、《根の国》までは最低でも半年以上かかるということよね？」

「あ、アルルクシルは普通半年以上かかる道程を、一日で走破しなければ、お師匠様を殺せないですね。《乙女の泉》と《根の国》は大体正反対の方向にありますから、西回りでも東回りでもその距離は大してかわらない。なるほど、確におかしいですね」

「……………」

「……………」

自分で驚いてどうする——フウルウもディーナザードも思わず沈黙した。

二人とも、この頭のいい少女のことだから、とっくにこの矛盾には気付いているか、あるいはその時間差を覆す殺害方法——例えば、遅効性の毒薬とか、(鵜が扱う異常な巫術を応用しての)超長距離攻撃とか——の心当たりがあるのだと期待していた。だが、どうやら、単に『お師匠様が言っていた』だけで、鵜は無条件の思考停止に陥ってしまうだけらしい。

「では、そもそも、君はアルルクシルが師母殿を手に掛けたところを見たのか？」

「いえ、特には」

「…………じゃあ、何故、アルルクシルが師母殿の仇だと思うの？」ディーナザードが禁断ともいふべき問いに手をつけた。

「お師匠様が言っていましたから」

…………果たして、鵜の仇討ちまでの道程は近いのか遠いのか？